

スリズマティック・バド

七色彩蕾



香椎 愛莉

1
「あのっ…長谷川さん
今日はありがとうございました。」

「愛莉」そお疲れさま。
お礼なんて必要ないよ、
愛莉が頼ってくれるなら
オレも嬉しいから。」

「あ…はい♪
えへへ…」

2
今日は愛莉と二人、
体育館でデイフェンスの
練習—。
努力家の愛莉との練習は、
オレにとっても身になる
部分が多い。

3
「は…でもやっぱりちよっと
疲れちゃいました★」

はにかみながら床に
身体を預ける愛莉。
…何気なく支えるように
腕を形作るのはやはり—
重いのだろうか？

1 「…長谷川さん？
どこを見て—
…っ!？」

年齢にそぐわない
立派な胸を抱え込む
ように腕を組む愛莉。
…しまった、思わず凝視
してしまった。

2 「……」
「いいや違うんだ！
コレはその…さっき
ぶつかったところは
大丈夫かな…
って思っ—！」

3 黙り込んでしまった
愛莉に慌てて言い繕う。
実際、ゴール下での
攻防の折に肘をぶつけて
しまったのだ。
…こちらにはダメージ
でなく幸福感が残った。

1 「あ…そ、そうですか…
はい、大丈夫ですよ？
えへへ…」

そう言つて平気なのを
誇示するかのよう
大きく揺らす。
…わざとじゃないよなあ★

愛莉にとつて大きな胸は
コンプレックスのひとつ
なのだが—
男として思うことは
「もつたいたい」の
一語に尽きる。

2 「え…と…
は、長谷川…さん？
そ、そんなに心配
ですか？」

3 はたと我に還る。
いかん、また凝視
してたらしい★
申し訳ない気持ちで
いっぱいになった。

「だったら—直に
確かめて…みますか？」

1
愛莉が何を言っているのか理解する前に、体操着の白い布地がおずおずと捲りあげられた。

2
「え、えへへー
ほら…なんとも
なっていないでしょっ」

いつものはにかみも、赤く染まつた頬のせいで妙に艶かしく見える。これは——なんだろう。思考が追いつかなくなってきた★



1
「も…もっ少し
ちゃんと見せて
もらっても…ふふ…」
「え…あの…
い…どうも…ふふ…」

2
戸惑いを滲ませながら
承諾してくれる愛莉。
——たしかに、痣に
なったりしてる部分は
見当たらない。

3
「は…長谷川さん…
ち…近い…です。
い…息が当たって…」
愛莉が悩ましげな
声を漏らす。
こちらの意図は
ただ漏れのような
気もするが——
嫌がつて…ないよな？

1 「……うん、特に違和感は無
いみたいだし、愛莉が平気なら
大丈夫じゃないかな。」

——いいかげん理性を
取り戻す時だと感じたオレは、
無理やり普段通りの
口調に戻してそう告げた。

2 「……ほ、本当……
ですか……？」

そんなオレの努力を
無にするように
潤んだ瞳の愛莉が
訴えかける。

3 「長谷川さんさえ
よければ……もっと、
ちゃんと調べて
くれませんか……？」

1
…そして今、目の前に
○学生にあるまじき
豊満な胸が晒されていた。
—ああ…やわらかそう♪

「…ぶっごぞ…長谷川さん…♡」

「あ…愛莉…?」

男として当然のように
目を奪われながら、
頭の中は大半が
クエスチヨンマーク。

2
「お…男の人は
大きい胸が好きって
よく聞くから…
長谷川さんも私の胸を
好きになつてくれたら…
私の中で何か変わる
かな…って思つて…☆」

—そうか。

愛莉は愛莉で
コンプレックスを克服
しようとして努力してるのか…。
その相手としてオレを
選んでくれるというのは
この上なく光栄なことだ—

「ん…わかった、愛莉。
…イヤだったらちやんと
言っただよっ!」

3
「…長谷川さんなら…
長谷川さんだから…
イヤじゃないです…♡」

1
外気に晒され、
心なし肌寒そうに
震える大きな胸に、
ゆつくりと手を
伸ばす――

2
「……」

軽く息を飲む愛莉。
――無理もない、
ひなたちゃん達なら
ともかく、男に
触れられるのは
初めてのことだろう。



1
それでも——
心を鬼にして(?!)
両側から包み込むように
優しく手を添える。

2
「……あ……♡」
——愛莉の口から
艶かしい吐息が
漏れた。

1 「うわ……すごいげえ
やわらかい……っ☆」

「ほ……ほ……っ……っ☆」

2 感動のあまり
思わず声が出た。
愛莉の顔がさらに
赤味を帯びる。
しまった、さすがに
無神経だったか★

3 「う……うめん……っ！
……その……愛莉は、
やっぱりこの胸が
キライ……？」
謝りながらも——
少し待って、そう
問いかけてみた。

1 「——以前は…他のみんなと違うこの身体の全部がイヤでした…。でも今は、この背の高さのおかげでみんなの力になれるのが、すごく…嬉しいです。」

2 背丈を指摘しただけで泣いていたあの愛莉が——それを誇れるようになるくらい精神的にも成長を遂げていた。

3 「ただ…この胸はまだ…時々でもやっぱり、その…え、えっちな目で見られたりするし…」
「…面目がじゃくません。」
…平謝り★
どう考えてもそのうちの一人であった。コーチ失格である。

1 「あ、えと、だから、は…長谷川さんにさう見られるのは…イヤじゃなくてその…さう、へんこドキドキして…」

2 …おや…？
これは…素直に喜んでもいい告白…
—なのでは…？

3 「…長谷川さんがこの胸を好きだつて言ってくれたら…私も、好きになれるのかも…つて…え、えへへ…♡」
いつものように
はにかむ愛莉。
これは…最大限の
誠意をもって
答えなくては—

1
「——うん…
好きだよ愛莉。」
「…はわ…っ!」

2
「オレにとって愛莉の胸は、
キレイで、やわらかくて、
この上なく魅力的に
思える——って愛莉…?」
…なにか反応がおかしい…
オレへんなこと言ったかな?

3
「えあ…は、はい
む…胸の話なんですわね…
私ったら…えへへ…★」
「?」
少し残念そうな
素振りを見せて、
やっぱりいつものように
はにかんだ。

1
気を取り直して、
今度ははつきり
愛撫をするように
手を動かす。

「っん…
は…あ…ん♡」

2
桜色の頂に親指を
添えて、優しく、
しかし強めに
こね回してみた。
「あ…っや…そんな…
先っぽ触っちゃー」

3
ひなたちゃん達も
さすがにこういう
触れ方はしない
だろうから、
戸惑っているのだろう
—というか、
感じてる…のかな？

「は…は…ん♡」

「…んっ」

1
「愛莉…ひよひよと
気持ちいい…。」

2
「はっ…
わ、わかりません
…ひなちゃん達に
触られても
くすぐったいだけ
なんですけど、
は…長谷川さんに
触れられると、その
…なんだか電気が
走ったみたい…。」★

3
そのまま真っ赤に
なつて黙り込む。
むう…いっそのまま
抱きすくめてしまいたい。

1
「ふあ……!?
あつ……は……
長谷川さん……っ?」

2
拒否されるのを
覚悟しつつ、
乳首に顔を近づけて
その頂に舌を
伸ばしてみた。

3
「んあ……そ、そんなとこ
舐める……なんて……
はうん……っ♡」
甲高い喘ぎが響く。
……どうやらイヤがっては
いないようだが一
愛莉っつて実はけっこう
感度いいのかも……。

2
先つぽを舌で舐めるたびに、愛莉の漏らす甘い声が脳を刺激する。

1
「あは……っん……んあ……
あ……んああん……っ♡」





1

両の手で豊満な胸を弄びながら桜色の乳首を口に含み、ちゅちゅと音を立てて吸い上げる。

2

「ふあは……っあ……♡
はせ……がわさん……
赤ちゃんみたい
です……っ♡」

心なしか
楽しそうな声で
そう言うと、
愛莉の両手が
驚くほど優しく
オレの身体を
包んだ。

1
「んあ…は…あっ
…ああん…っ♡」

2
貪るようつに
乳首を舐め、吸い、
それに伴って愛莉の
喘ぎはいつそう
激しくなる。

1
自在に形を
変える大きな胸を
少し強めにこね回し、
口に含んだ乳首に
軽く歯を立てた
その時――

2
「んは……っ……♡
はわ……あ……
ああん……っ!!!」

3
愛莉の身体が
弓形に反り返り、
ひときわ高い
喘ぎがほとばしった。

1
「い……いやいやー！
そんなことはないぞ!?
むしろ愛らしすぎますます
好きになっちゃったくらいだー！」

涙目の愛莉を優しく抱きすくめる。

——落ち着くのを
見計らい、あらためて
耳元でささやいた。

2
「……うん、こっぴついう
言い方はなんだけど…
その胸も含めて全部が
愛莉の魅力なんだから
…オレは、愛莉が
大好きだよ♪」

「長谷川さん…
ありがとうございます
ございます…っ♡
えへへ…♪」

3
…そう、
いつものように
はにかんだ笑顔が、
愛莉を心から
愛おしく感じさせる
——それは決して
この場限りの方便
などではありえない。

「えー…
と、言うわけで…!」
「は…はい、あの…
これから何を…?」

場所を移して体育倉庫。
マットの上には
上半身ハダカになった
愛莉が戸惑い気味に
寝そべっていた。

「うん、愛莉のおっぱいは
たまらなく魅力的だと
いうところに落ち着いた
んだけど—」

「…オレのほうはオレのほうで
治まらなくなっちゃって…★」

「おっぱいなく…」

バツの悪い思いを
しながら、股間に張った
テントを指し示す。
それに思い至った愛莉が、
顔を赤らめながら問う。
「あ…あの…それって、
男の人がえっちな気分にな
ったからおっきくなる
って言う—」

「そう、いわゆる
『おちんちん』です。」
…あ、真っ赤に
なって俯いた。
ううん、愛莉は
可愛いなあ♪

1 「…え…と、そ…それって
どうすれば治められる
んでしょうか…?」
「うん、いい質問だね
愛莉くん☆」

3 「せうかくだし、
愛莉の大きな胸
だからこそ出来る
ことを教えて
あげようと思って」
「え…じゃあ—
私がそれを鎮めて
あげられるん
ですか…?」

2 股間を勃起させながら
得意げに振舞うバカ一人。
—オレなら絶対
トモダチにはならない★

4 「もちろんだよ。
…愛莉、お願いしても
いいかな?」
「は、はいっよ
私でできるなら
何なりと…っ—」

1 愛莉の承諾を得たので
——変に勿体ぶらず、
硬く張ったペニス
を曝け出す。

「ひんてい!」

3 そっちで驚いてるのか!?
ま、まさか万里のやつ、
妹相手に妙なこと
やってるんじゃないか——
(→教子相手ニ
妙ナコトヤツテルヤツノ
台詞ジャンナイヨネw)

2 なんとも可愛らしい
悲鳴が上がった。
……うん、女の子だったら
驚く……んだらうなあ。

「お……お兄ちゃん
の……おっぱい……?」

4 「……あ、そ……そっか、
お兄ちゃんのは
おっきくなつて
ないから——」
……どうやら以前に
お風呂とかで見たのを
引き合いに出した
というところか……
疑ってすまん、万里★

1

「…愛莉、オレのが
こんなに大きく
なってるのは、愛莉が
とても魅力的だから
なんだよ?」

「わ…わたし—
魅力的…ですか?」

「…いいえ…っ…
長谷川さんにそう
言ってもらえるのが、
一番嬉しいです…っよ」
年相応の愛らしさで
微笑む愛莉の中に、
女の艶やかさを含んだ
蕾が垣間見えた
気がした—。

3

「ああ…オレなんかの言葉で
表現するのもなんだけど—
愛莉はすごく可愛らしい
女の子だよ」

2

「…えと…
それで私は、
どうすれば
いいですか…?」
「あ、うん…
それじゃ
失礼して—」

4

1
両腕で寄せてもらった
胸の谷間にペニスを潜り込ませる。
先走りのおかげで思いのほか
スムーズに入った。

「……うあ……はあ……っ！」

2
愛莉の谷間の感触が
絶妙すぎて、思わず声を
上げてしまった。

「……お、男の人……えっちな
声、出すんですね……？」

意外だったのか、
谷間に挿入された
ことよりも、オレが
声を上げたことに
驚いてる様子の愛莉。
「そりゃ……まあ、
愛莉の胸が気持ち
よすぎて……さ★
そのへんは男も女も
変わらないよ？」

「わ……私のおっぱい……
気持ちいい……ですか？
えへへ……♪」

4
——抵抗は無い
みたいでひと安心だ。
なんだか嬉しそうに
はにかむ愛莉だった。

1 「じゃあ……動くよ……」
「苦しかったらさっさと吐いて」

「は、は……っ……」
「お任せします……っ」

「ん……っふ……」
「はう……ん……♡」

3 最初は興味深そうに
自分の胸の間を
出たり入ったりする
ペニスを眺めていた
愛莉だったが、次第に
吐息が荒くなつて
いくのが判った。

2 ゆっくりと、谷間を
往復させる——この世のもの
とも思えない暖かさ
柔らかさに包まれ、
気持ちいいこの上ない。

1

「は…っあん…っ…
ふぁ…うん…っ…♡」

すっかり甘やかな
声を出すように
なってしまった愛莉。
とろんと潤んだ瞳が
——実にエロいw

2

「はわ…また…おつきくなつて…♡
は、長谷川さんのおちんちん…
すっごく…熱い…です…っ♡」

3

「うん…っ♡
愛莉のおっぱいも…
あつたかくて、
やわらかくて——
最高に気持ち
いい…っ♡」

いつしか抽送の
速度も上がり、
胸元は汗と先走り
でべとべとになっていた。

1 「ふぁ…んっ…あ…
はっ…ああん…っ♡」

手を添えて愛莉の胸を
愛撫しながら、腰の動きは
速くなるばかりだ—
それに併せて愛莉の
喘ぎも高まっていく。

やはり愛莉は感度が
良いらしい。
さつきは自覚して
なかった快感を今は、
微かに不安の交じった
表情で訴えかける。

「ああ…オレもだよ
愛莉…今度は、
いっしょにイっっ…なよ」

「はっ…は、はい…
お願いします…っ♡」

同じ感覚を共有していると
知って、不安顔が一転、
嬉しそうな表情に変わる—
それだけでもう…爆発寸前
まで昇りつめた。

2 「は…はせがわ…さん…っ♡
私…わたしまた…なんだか
身体がふわ…ってなっ…っ♡」

4

3



1

「…う…ん…ん…ん…」
「うん…ん…ん…ん…」
「ああん…ん…」

2

絶頂に導かれるまま
白濁した欲望を
解き放つ—
戸惑いの声に続いて、
愛莉の高い喘ぎ声
が響いた。

1
「んんん…っ」
はっはっ…っ♡

2
「んんん…っ」
「めん愛莉…っ！」

3
我に還つて愛莉を見ると
口の中まで精液まみれ
になつていた—
それをよそに未だ
少量ながら白濁液を
吐き出す我が息子。
おのれは…★

「…これって、
赤ちゃんの素…？
…変わった味、
ですね…★」

特に嫌悪感も
無いようで、
素直に味わつた
感想を漏らす。
…いやいや純粹にも
程があるだろう—

4
…ああもう可愛いなw

1
「ごめん、愛莉…
べとべとに
なっちゃったな☆」

2
「あ…だ、
だいじょうぶですよ…
…ちまつとびっくり
しちゃったけど—
それよりも…」
軽く息をつき、
流れ落ちる精液を
気にも留めずに、
愛莉はいつものように
はにかんで—

3
「長谷川さんと…
ちゃんといっしょに…
『イけ』ました♡
…すこく…
うれしかった♡
…えへっ♪」

結局——二人ともに
昂つた気持ちは治まらず、
愛莉も望んでくれたので
最後まで続けることになった。

1

「ふうん…ですか？
…ちよごと…
恥かしい…です★」

倉庫の壁に手をつき、
愛莉がお尻をこちららに
向ける——
性徴著しい身体は、
年齢に似合わない色気
を醸し出していた。

「ふうん、愛莉は
色っぽいなあ♪」
「…それって、大人の
女の人に言う言
葉ですよね…
あんまり
嬉しくない…かも」

3

4
珍しく不満を滲ませる愛莉。
他の女の子からすると
贅沢な悩みかもしれない。

5
「ごめんごめん…
褒め言葉には
違いないから
赦してくれると
嬉しい。
…それに——」

2

「は、はわわ…っ!?
わ、私ひよっとして
お漏らししちゃい
ましたか…っ?」
さつきからおまたが
へんな感じだったんで、
まさかとは思ってた
んですけど…っ★

1

「スパッツにこんな
大きな染みを
作ってるあたり、
あながち子供って
わけでもないし…」
少し意地の悪い
含み笑いを漏らす。
——愛莉の大事な
部分はすつかり
濡れそぼっていた。

3

「い、いやいや!」
お漏らしじゃないよ!
これはエッチな気持ちに
なったら誰だって
出てくるものだから!

「はっ…
で…でも…」

「オレのだって
さつき挟んだ時に
ぬるぬるしてただろ?
あれと同じだから!
お漏らししたわけ
じゃないよ!」

4

「はっ…そ…
そっつえば—
よ…よかった…
お漏らしした
なんて恥かしくて
長谷川さんに
言えない…★

スパッツが濡れてる
のを指摘したのは
オレなんだが、色々と
こんがらがってるらしい。
——うむ、やはり
「色っぽい」よりは
「可愛い」がしつくり
来るな☆

5

「—そんなに心配なら、
オレがキレイにしてあげるよ☆」
「はっ…ひゃん…っ!!」

1

2
返事を待たずに、
優しく、しかし素早く
スパッツを引き下げる。

3
「はわわ…
は、恥かしいです
長谷川さあん…っ☆」

外気に晒された
下半身が寒そうに
震える…っわ、
愛莉のアソコから
スパッツに糸ひいて
—すっげえエロいw



2

「んあ…ひ…っ
…ひいん…♡」

ふくらんで顔を
覗かせたクリトリスを、
軽くひつかくように
指で愛撫する――
その度に、愛莉が
甲高い喘ぎを上げた。

1

「ひゅん…っ!?
ふあ…や…
そんなとこ…っ」

思わず生唾を
飲み込み、
無言で愛莉の
アソコに指を
伸ばしてみた。



2

少し指の動きを
止めて愛莉を伺うと、
蕩けたような瞳で
深い吐息を繰り返す。
——嫌がっては
…いないよな？

「んっ…っ…っ」
「んっ…っ…っ」
「♡んっ…っ」
1



2

止まってしまった
愛撫を訝しむ様に、
肩越しに流し目を
送ってくる愛莉。
——いや待てその
表情は反則だろう!?

「は……
はせがわ……
さん……？」

1



2
恥かしげな
声が漏れるが、
特に嫌がる
素振りは見せない。
…全てをオレに
任せてくれてる
ようだ。



1
両の手の親指で
ゆっくりと愛莉の
恥丘を押し広げる。
「……はっんっ……っ♡」



軽く舌を差し入れ、
肉芽を転がす度に
妖艶さを伴った
高い喘ぎが上がる。

2
「あ…っはん…っ！
くう…ふわああ…っ♡」



「ふあは…っ…
あ…んああ…あ♡」
「キレイにしてあげる」
という最初の言葉を
守るため、
愛莉の入り口を
舌で舐め上げた。

1

2

「……ごめん愛莉
——こっちもガマンの
限界だよ……☆」

とめどなく溢れる愛液を
舐め取ったところで、
愛撫を止めて立ち上がる。

1





2

「…はい…♡
来て…ください、
長谷川さん…♡」

ガチガチに反り返った
肉棒を指し示すと、
蕩けきった女の表情で
愛莉は頷いた。

1



2

軽く息を呑む
愛莉の声で
我に還り——
改めて気持ち
を
落ち着かせて。

「だいじょうぶ……
できるだけ優しく
するから——
まかせて愛莉。」

「は……は……♡」

逸る気持ちを
抑えながら
ゆっくりと、
愛莉の入りに
ペニスを宛がう——

1

背中を優しく抱きとめ、
愛莉が安堵の表情を
見せたところで——
ぐつと腰を押し進めた。

1

2

「んんん……んんん」

眉根がぎゅつと
寄せられ、
その痛みを切実に
訴える。

3

「……はっ……
んはあ……っ★」

深く吐息を
繰り返し、
痛みに耐える
愛莉——
目尻から滲む
涙が痛々しい。

「は……ふう……
うあ……はあ……」
次第に息の
荒さが消え、
幾分か穏やかな
呼吸を繰り返す
ようになった。

1

「……ありがとう、愛莉。
最後までガマンしてくれて。」

オレの肉棒は、今や
すっかり愛莉の暖かさに
包まれていた。

「ごめんな、
痛かったらろ？」
……愛莉は強いな」
「そ、そんな……
は、長谷川さんが
ずっと優しく
抱きしめてて
くれたから……
え、えへへ……♡」

3

4
その言葉を聞いたオレは、
いつそう強く、愛莉を
抱きしめるのだった。

「ふひゃあ……ああ……
んっ……ふあ……♡」

「だいじょうぶ」と言いつ
愛莉を信じてゆっくりと
腰を動かすと……思いのほか
甘い喘ぎ声が聞こえた。

「愛莉……？
痛くない……？」

「はい……長谷川さん
が入ってきた時は
痛かったです……
今はそんなに……
えと、痛い、と
いうより——」

「——気持ちいいっ」

「は……はい……♡」

消え入るような声で
顔を真っ赤にする愛莉。
はっはっは、こいつめ、
オレを萌え殺すつもり
だなあ？↑バカ

それならば、と——
腰の律動を速くして、
素直に快感を味わわせて
もらおうとする。

1

「は……んっっ
あ……んんっ……
あうんっ……♡」

2

リズムミカルに
抽送を繰り返すと、
それに合わせて
歌うように、
高い喘ぎが上がる。

「あ……っふあ
……や……っん
……あ……んっっ♡」

悦びの入り
交じった喘ぎが
脳天を刺激して、
興奮は高まる
ばかりだ。

3

1
「ふわ…あ…♡
はあん…っ…♡
は、はせがわ…♡
さあん…っ♡」

2
当初よりも強めに
愛莉を突きながら、
背中越しでもはつきりと
暴れまわるたわわな胸を
鷲掴みにした。

3
「はう…んっ♡
おっぱい…っ♡
気持ちいですっ…っ♡
もっ…もっ…
触ってくださいっ…♡」
強すぎず弱すぎず、
我ながら絶妙な
感覚で二つの乳房を
揉み、時に先っぽを
摘むように愛撫する。



2
「ああ…愛莉…
おっぱいも…愛莉の
なにもかも全部…っ
大好きだよ…っ！」

1
「あっ…んあ…♡
んあ…っはあん…っ
は…はせがわさん…っ
…私のおっぱい…
好き…ですか…っ？」

3
「はわ…っ♡
はっうんっ…!!
嬉しいですよ…っ♡
長谷川さん…っ
はせがわさん…っ♡」
名前を繰り返す
愛莉の甘い声が、
急激にオレを絶頂へと
導いていた—

2
留まるところを
知らないように、
どくどくと精液が
愛莉に注がれる。

1
「んんん…んんん…」
「はひゃ…んんん…
らわわあ…んんん…♡」

3
「ああ…
すごい…♡
お腹の中が、
あつたかいので
いっぱいになつて
ます…っ♡」

「ごめん愛莉…
そのまま出しちゃつて
…平気だった？」

謝ったところで
後の祭りである。

失礼だがちよつと
意外だった。

「私って、やっぱり
生理を迎えるのが
早かったから、
お母さんがちゃんと
知っておきなさい…」

…なるほど、さすがは
スポーツ一家、きつと
健康管理の面でも
ほぼ完璧な指導を
されてるに違いない—

「えと— はい…今日は
大丈夫な日だったはず
なので…平気ですよ♡
えへへ…」

「…そっか— 愛莉って、
ちゃんとそういつ日付とか
理解してるんだね？」

「こないだお兄ちゃんに
知られそうになった
時にはさすがに
慌てちゃいましたけど…
えへへ…★」

—そしてオレは、
「七色彩蕾」が持つ
可能性を少なからず
侵してしまったことを…
絶対に万里にだけは
知られてはならない—